9頁目

大きな足跡をのこした江戸時代後期の国学者

塙(はなわ)保己一(ほきいち)のおはなし

点字がない時代

1825年にフランスで発明された点字が日本に伝わったのは、明治時代でした。それまで、日本では盲人が自分一人で本を読む方法はなかったのです。本を読もうと思ったら、必ず誰かに音読してもらう必要がありました。

そんな江戸時代後期に、一度聞いただけで、その本の内容をほぼ完璧に覚えてしまうという驚異的な集中力と記憶力を駆使して、学者として大きな足跡を残した盲人がいたのです。それが塙保己一でした。

生い立ち

塙保己一は、1746年に現在の埼玉県本庄市に生まれ、7歳のときに失明、11歳で母を失います。そこで保己一は単身で江戸に出て、当道座(とうどうざ)（当時の盲人組織）に身を寄せ、あん摩、鍼(はり)、灸(きゅう)、音曲(おんぎょく)などの修行にはげみますが、どれも上達せず苦労したようです。絶望して自殺未遂を図ったこともあったと伝えられています。

そんな保己一に対して師匠は「あと3年は面倒をみるから、自分が好きなことをやってみなさい。」と、学問の道に進むことを認めます。

当代一流の学者などに学びはじめた保己一は、その才を認められてめきめきと頭角をあらわし、学者への道を歩むことになりました。

群書類従(ぐんしょるいじゅう)の編纂(へんさん)

保己一は学者としても組織人としても、多彩な業績を残した人ですが、特に現在まで大きな影響を与えているのが「群書類従」666冊の編纂刊行事業です。

この事業は完成に40年の歳月を要した、一大プロジェクトでした。日本国内で手に入る政治、制度、歴史、文化、文学などあらゆる分野の文献を集大成して、誰にでも読める形で出版し、後世に伝えるというものです。版木1万7千枚以上が、200年以上を経た現在も印刷できる状態で残されています。（いまでも（社）温故学会に申し込むと、刷りたてが購入できます。）

当時の文献は、多くが人の手で書き写された写本でしたので、誤記や欠落なども多々あったようです。そのため、複数の写本を読みくらべたり、関連する文献を参照したりすることによって、より正しい記述内容を推定することが必要でした。万巻の書物に通じた保己一ほど、この作業にうってつけの人はいなかったでしょう。

現代の学問レベルからみても、この校正作業の精度はかなり高かったと思われます。たとえば、岩波文庫の「王朝漢詩選」という本では、群書類従の記述をテキストとして採用しています。

ひとがら

保己一にはいろいろな逸話(いつわ)が残されていますが、もっとも有名なのはこれでしょう。

ある夜、保己一が弟子たちに源氏物語の講釈をしていたところ、突風が吹いて行灯(あんどん)の火がみんな消えてしまった。

室内は真っ暗で何も見えない。

それでも、なにごともなかったように講釈を続ける保己一。弟子たちは「先生、お待ちください。灯りがみんな消えてしまいました」と言うと、保己一は「やれやれ、目あきというのは不便なものだなあ」と笑った。

保己一の気さくなひとがらは、こんな逸話からもしのぶことができます。

中津文彦さんの小説シリーズ、「塙保己一推理帖」では、そんな保己一のいきいきとした姿が、江戸の風俗人情とともによく描かれています。とても面白くて読みやすいので、おすすめです。（残念ながら絶版のようなので、図書館や古書店などで探してみてください。）

書籍の表紙の画像　右下段　中津文彦著　塙保己一推理帖（光文社）

9頁目、以上です。

他のページも含む全体版は下記のリンクからご覧下さい。

[ファイルのダウンロード](https://www.rehab.go.jp/fukuoka/files/centernews128.docx)